庭野平和財団　平成 23 年度最終報告書

1. 事業名

いのちのつながり：中スラウェシ、山の民の文化に学ぶセミナーワークショップの開催

2. 実施団体

一般社団法人あいあいネット

3. 事業期間

2011 年 8 月 1 日～2012 年 11 月 30 日
※「活動の内容と方法」に記した理由で 3 カ月間の事業期間の延長を申請

4. 活動目的

あいあいネットは、2004 年以来、「いりあい（コミュニティを基盤とした資源の共同管理）」をキーワードとして、インドネシア・中スラウェシの山村と日本の山村の経験をつなぎ、学びあう「いりあい交流」事業を展開してきた。2007 年からは、交流の拠点の一つとなったトンプ村で、村に伝わる歌や民話、儀礼を、映像・文章・絵の形で記録し、学びあう活動を実施した。日本の映像記録関係者、NGO、地域研究者、中スラウェシの地元 NGO の若者たち、村人たちが協働しての作業である。このトンプ村での記録作業から、３本の映像資料（①森の伐開儀礼、②陸稲の種まき、③陸稲の収穫）と文章と絵による聞き書き資料がまとめられた。

本活動は、これまでの記録作業と学びあいの成果を題材に、山の民の文化を見つめなおすセミナーワークショップを開催し、中スラウェシの地元政府関係者、NGO、トンプの村人などと、地元の文化を尊重した地域発展のあり方を議論することを目的とした。参加者の主体的参加を促すワークショップ形式を取り入れることで、参加者の間から具体的な実践にむけたアクションプラン（素案）が生まれることを目指した。

5. 活動の内容と方法

本事業では、主として、①記録資料の再編集、②インドネシアでの準備会合、③セミナーワークショップにむけた準備作業、④セミナーワークショップの開催、⑤開催後のフォローアップ、⑥日本での成果報告会、を計画・実施した。活動の枠組みに大きな変更はないが、以下の二つの理由から、実施日程の変更が生じた。

第一に、これまでに蓄積してきたトンプ村での記録資料を一般読者に分かりやすい形に再編集する作業に予想以上の労力と時間がかかったことである。記録資料はすでに文章化されていたが、それを一般読者にいかに伝えるか、伝えるべきメッセージの核は何か、記載内容・記録内容に間違いはないかを再確認し、内容を取捨選択し、再編集するプロセス

に予想以上の時間を費やすこととなった。とくに、インドネシア側の関係者は、村々で実践活動に従事してきた NGO の若者とトンプ村の人々であり、文章のとりまとめになれているとはいえない。また、村の芸能や儀礼に関わる事柄の多くは、現地のカイリ語で表現されており、インドネシア語にいかに訳すか、再編集の過程で繰り返し議論が必要となった。

これらは立案時点でもある程度想定できる点であり、十分考慮した上で計画立案する必要があったと思う。しかし、再編集作業は改めて、トンプの村人と関係者の間で、地元の文化について議論を深め、成果を実践に生かすためのアイディアを交わす、よい機会となった。再編集作業を丁寧に進めつつ、セミナー開催に向け、地元政府関係者（パル市教育局、シギ県観光文化局、地元小学校・高校教員）などとの関係づくりを並行して進めた。

第二に、本事業をインドネシア側でとりまとめていた中心人物であるヘダール・ラウジェン氏が 2012 年 7 月 7 日に 51 才で急逝したことである。カイリ族の村々に伝わる文化・慣習と多様な言語を生活体験として理解しているヘダール氏は、活動に関わる若者、トンプの村人、政府関係者、日本人関係者をつなぐ要の存在となっていた。ヘダール氏の急逝により、7 月 19 日に予定していたセミナーワークショップは延期せざるを得ない状態となり、活動期間の延長が申請した。関係者との話し合いで、セミナーワークショップは、ヘダール氏の死後 100 日目の法要直後の 10 月 17 日に実施した。

日程の変更は下表のとおりである。日程の変更に関わらず、目標とする成果が達成できるよう、下記のような工夫を試みた。

当初の計画	日程変更後の流れと工夫
記録資料の再編集（2011 年 5～7 月） これまでに蓄積された記録資料の再編集し、本と DVD を作成。作業はインドネシアと日本の関係者がそれぞれ進め、メールなどを通じて検討・調整を行う。	**記録資料の再編集**（2011 年 5～2012 年 6 月） 再編集作業を丁寧に進め、セミナーワークショップ開催準備、地元政府との関係構築などを並行する形で進めた。2012 年 3 月には日本人関係者が渡航し、映像の字幕の再編集、イラストの修正・追加を話し合った。
インドネシアでの準備会合(2011 年 8 月) 当団体・島上がインドネシアを訪問し、再編集作業の最終とりまとめとセミナーワークショップ開催にむけた打ち合わせを行う。主要な地元政府機関と教育関係者などを訪問。開催までの実施スケジュールと役割分担を確認する。	**インドネシアでの準備会合**(2011 年 9 月) 島上がインドネシアを訪問し、再編集作業の進捗を確認。インドネシア側関係者と今後の活動日程を話し合った。
開催に向けた準備作業（2011 年 9～12 月） インドネシアと日本でそれぞれ準備を進め、メールなどで連絡調整を図る。インドネシア→トンプ村での話し合い、政府機関・関連団体など話し合い、広報、準備など。日本→日本での山村文化記録活動の紹介資料の作成、など）	**開催に向けた準備作業**（2011 年 9 月～2012 年 7 月） 記録資料の再編集作業と並行して、シギ県観光文化局、シギ県・パル市・ドンガラ県の教育局との関係づくりを進めた。関係者の話し合いの中から、いくつかの具体的なアクションプランが生まれた。

セミナーワークショップの開催（2012 年 1 月） 地元政府関係者、教育関係者、関連団体、山村住民など計 50 名ほどが参加し、アクションプランを議論し、素案を作成する。	**セミナーワークショップの開催**（2012 年 7、10 月） セミナーワークショップの開催を予定していた 2012 年 7 月、ヘダール氏が急逝したことから、7 月はトンプ村で成果を共有し議論する小集会にとどめ、セミナーワークショップは 10 月に延期して開催した。
開催後のフォローアップ インドネシア→アクションプラン素案のさらなる検討と実施にむけた話し合い。日本→これまでの成果を日本語でとりまとめる。	**開催後のフォローアップ** セミナーワークショップの開催が遅れたことから、準備のプロセスで、政府機関や学校などとの関係構築と議論を進めた。そのプロセスででてきた幾つかのアイディアについては、アクションプランとして検討した。
日本での成果報告会 当団体が拠点をもつ川崎市などで成果報告会を開催する。	**日本での成果報告会**（2012 年 9 月） 2012 年 9 月、当団体の総会の機会に合わせ、成果の中間報告をおこなった。

6.　活動の実施経過

主な活動の経過は下記のとおりである。

※以下、日本人メンバーのインドネシア訪問時期を目途として記し、その間のメールを通じたやりとりや、インドネシア側メンバーの動きについては省略した。なお、島上の渡航費については、2012 年 10 月を除き、科研費および自己資金を活用した。

2011 年 9 月 10～12 日

当団体・島上が中スラウェシを訪問。特に文章の再編集作業の進捗について確認し、今後の作業日程について話し合った。イラストを十分活用し、小学校高学年以上であれば読める平易な文体でまとめること、意味や解釈を外部者が付与するのではなく、トンプの村人がいかに語り、実践しているかを具体的事実として記録することが編集方針として再確認・合意された。

2011 年 12 月 21～22 日：

島上が中スラウェシを訪問。セミナーワークショップの開催時期について話し合った。再編集の進捗状況と関係者の訪イ可能日程を考慮し、3 月に、日本の他のメンバーが渡航し、本の最終仕上げのワークショップを開催すること、成果発表のセミナーワークショップは 5 月以降に開催することが合意された。また、トンプ村での記録作業の成果が地元学校の教材・カリキュラムとして活かされる方策について、可能性をはなしあった。その一つとして、トンプ村で試みた「聞き書き」の手法が高校の郷土教育で活用される可能性について議論した。インドネシア側のメンバーが高校教員らに働きかけを開始し、その状況をその後、メールなどで連絡調整しあった。

2011 年 12 月 23～26 日

ヘダール氏と島上がジョグジャカルタに赴き、出版社と成果出版の形について協議した。

2012 年 3 月 25 日～4 月 2 日

トンプでの記録作業に関わってきた日本人メンバーである澤幡正範、岩井友子、島上がパルを訪問し、成果の最終仕上げのワークショップを行った。具体的には、映像記録への字幕内容の確認と編集、原稿の読みあわせ、イラストの配置と追加などを検討した。このプロセスにはトンプ村のリーダー２名も参加し、内容について再確認と議論を行った。

その後、インドネシア側メンバーは地元政府との関係構築をすすめ、セミナーワークショップの準備を進めた。その状況をメールで確認しあった。

2012 年 7 月 15～22 日

7 月 19 日に開催することとなったセミナーワークショップにむけて準備を進めていた 7 月 7 日、インドネシア側の中心人物であるヘダール氏が心臓発作のため急逝した。セミナーワークショップは延期を余儀なくされたが、島上は予定を変更せず、中スラウェシにむかった。関係者と話し合い、トンプ村で成果を共有する小集会をまず持つことになった。村人約 40 名が集まり、完成した 50 冊の本と DVD を配布し、記録作業に関わったメンバーが、本と映像を題材に自由な議論を促した。年配者らが集まる会合では発言することの少ない若い世代からも声があがった。ささやかだが、これは注目すべき一つの変化だった。

・穂刈唄を歌えるようになりたい。教えてほしい（10 代女性）
・村の伝統・慣習は大切にしたいが、学校や教会ではやめるべき風習として教えられるものもある。どうしたらよいか。何が正しいのかわからない（10 代女性）
・村の慣習は大切。若い世代に継いでいかなければならない（50～60 代男性）
・トンプには慣習があることを政府に示し、もう一度「トンプ村」としての認知をえたい（40 代、60 代男性）

（※トンプ村は自然保護区域に指定されたことから、1970 年に村人全員が強制移住の対象となり、解散された。現在、村人は麓の二村に分かれて住民登録し、代々暮らしてきた村に、法的には“不法”居住状態にある）

議論となった点については、トンプ村の人々とインドネシア側メンバーがさらに具体的なアクションについて話し合うこととなった。

2012 年 9 月 22 日

当団体の総会にあわせ、川崎市内で成果報告会を実施した。ヘダール氏の急逝とセミナーワークショップの延期のため、成果の中間報告という形となった。

2012 年 10 月 13～21 日

セミナーワークショップは、ヘダール氏の 100 日の法要があけた 10 月 17 日、パル市政府の協力をえて、市庁舎内の講堂で開催された。島上が中スラウェシを訪問し、このプロセスに関与した。セミナーワークショップには、政府機関、住民、大学・高校、NGO、地方芸能グループなど 80 名あまりが参加した（下表）。セミナーでは、島上が事業の背景について報告し、記録作業に中心メンバーであるシャハルンがこれまでの学びあいのプロセスと成果について発表。これをうけて、パル市市長（代理）、国立タドゥラコ大学講師、地元 NGO、ジャワ島に在住する在野の知識人らがディスカッサントとしてコメントした。農村・教育分野の実践家として知られるルム・トパティマサン氏をファシリテーターとして、会場参加者からの発言を促し、議論を進めていった。

今後にむけて必要なアクションとして提案されたのは、カイリ語をはじめとする地方語教育の強化、大学のフィールド教育の充実、NGO 実践家が村人の文化・慣習に理解を深めること、小・中・高校の郷土教育プログラムの充実などである。

当初、セミナーの後半では、グループディスカッション形式のワークショップを想定していたが、話し合いは全体セッションの中で進め、提起されたアクションについては、個別に関係機関と案を詰めていく形をとった。とくに、郷土教育プロクラムの充実に関しては、セミナーワークショップの準備段階から、インドネシア側メンバーが、パル市、シギ県、ドンガラ県の教育局および高校と議論を開始し、セミナー開催後、個別に具体的なアクションプランをつめていった。

山の民の文化に学ぶセミナーワークショップ参加者（10 月 17 日）		
●政府機関	**●住民**	**●NGO**
パル市政府	トンプ村代表	Bantaya
シギ県政府	ロル村村長・住民	Awam Green
シギ県観光文化局	サレナ村住民	Jalin
シギ県県議会議員	リンボロ村住民	地球の友
中スラウェシ州歴史文化研究所	**●住民団体**	JATAM
中スラウェシ州地方図書館	ボホトコン農漁民団体	LIBU
中スラウェシ州博物館	都市部農民フォーラム	Yayawan Merah Putih
バル・ポソ流域管理事務所	森林区域住民フォーラム	Yayasan Tanah Merdeka
●教育機関	**●地方芸能グループ**	Kontras Sulawesi Tengah
国立タドゥラコ大学教員	中スラウェシ芸術協会	SPKH HAM
大学生	トルルパ	AMAN Sulawesi Tengah
パル第五高校教員・生徒	プダティ	YPPMA Sulawesi Tengah
大学自然愛好会	バヌアタブラ、他	INSIST、他

また、インドネシア側メンバーの自主的な活動として、セミナーワークショップの終了後の夜、パル市周辺の地方芸能グループがそれぞれの地域の歌、踊りを披露する地方芸能の交流の夕べが持たれた。これは、中スラウェシの農山漁村の文化と尊厳を守る活動を実

施してきたヘダール・ラウジェン氏を追悼する集いでもあった。トンプ村での取り組みが紹介されるとともに、各地で地方芸能に関心を持つ若者や子供たちがそれぞれの活動成果を披露しあった。

7. 活動の成果

本事業は、セミナーワークショップの準備、開催、フォローアップのプロセスを通じて、下記の成果が生まれることを短期的目標としてあげた。

- ✓ トンプの村人が自らの文化を見つめ直し、誇りを取り戻す契機となる。
- ✓ 中スラウェシの州都に暮らす人々（特に地元政府関係者、教育関係者）が山村の文化についての理解を深め、地元の文化を尊重し、次世代につなぐ意義が再認識される。
- ✓ 山村文化を次世代につなぐ活動を進めている日イの実践者間の交流と協力が深まる。
- ✓ セミナーワークショップ参加者の間から、アクションプランの素案が生まれる。

先述のように、本の再編集作業に想定以上の時間がかかり、日程変更が必要となったが、再編集の過程で関係者との議論や関係づくりを進めるなどの工夫をし、目標とした成果は達成しえたと考えている。具体的には次の点があげられる。

第一に、『トンプの人々の世界』と題した本と映像記録 DVD が、中スラウェシの実践者、村人、日本人が協働する形でとりまとめられ、出版されたことである（初版として 1000 部を印刷）。中スラウェシはインドネシアでも文化的多様性が高い地域であるが、山の民の暮らしや文化を平易な言葉で綴った一般書は皆無に等しい。国内外の人類学者らが学術書として出版したものがあったとしても、それが地元の人々に読まれることは少なく、ましてや、各地で消えゆきつつあるカイリ語の労働歌や儀礼歌を文章と映像で記録したものは非常に少ない。『トンプの人々の世界』は 79 頁の薄い本として編集されたが、研究者・実践者・教育関係者らの間で予想以上に高い評価をえた。全国紙ビジネス・インドネシアの書評欄で取り上げられた他（添付資料）、本の存在・評価がソーシャル・メディア（facebook）を通じて拡がっていった。本の執筆と映像記録にあたったのは中スラウェシの町に暮らす 20～30 代の若者たちであり、若者たちが山の民の文化に学び、記録する意義、そしてその成果を発信する一つのあり方を提示できたのではないかと思う。

第二に、地元高校の郷土教育カリキュラムに、農山漁村での「聞き書き」の手法を取り入れる可能性（アクションプラン）を、地元の教育局関係者や関心を持った高校教員らと検討する作業がはじまったことである。「聞き

『トンプの人々の世界』
2012 年 6 月、INSIST Press、79 頁、インドネシア語

目次
・はじめに　～学ぼう、罰があたらぬように～
・近くて遠い、山の村
・自然と人間
・星を読む
・暮らしの領域
・崇高なる稲
・焼畑と稲
・収穫
・伝統的家屋
・暮らしと人々のつながり
・トンプの儀礼：メブイとヴンジャ
・おわりに　～トンプが教えてくれたこと～
映像 DVD：伐開の儀礼、陸稲の種まき、陸稲の収穫

書き」はトンプ村の記録作業でも一部取り入れた手法であり、日本では過去 10 年あまり、「森の聞き書き甲子園」という事業枠組みで高校生が主体的に参加する活動として全国的な拡がりをみせている。トンプ村での記録作業のような活動を学校教育に導入することは難しいが、「聞き書き」といった形に絞り込めば、カリキュラムに取り込まれる可能性は高い。インドネシア側メンバーは、セミナーワークショップの準備に並行して、教育局関係者や地元高校教員への働き掛けをはじめた。セミナーワークショップには「聞き書き」に関心をもったパル第五高校の教師と生徒も参加した。その後の話し合いを経て、現在、日本の高校生や行政との交流も視野にいれる形で、アクションプランが練られつつある。

第三に、トンプ村の存在に対する行政の注目が高まるとともに、トンプの人々の間から「トンプ村」として政府の認知を受けようとする努力が具体化したことである。シギ県観光文化局は、トンプの慣習・文化に関心を示し、トンプ村を「観光文化村」とする計画を村人に投げかけている。村人は、こうした政府からの注目をうまく活かし、記録作業に関わったシャハルンとともに、行政村としての認知をうけるための請願書をつくり、県に提出した。セミナーワークショップに参加したシギ県関係者とも個別に交渉がすすめられている。セミナーワークショップの直接的な成果とはいえないが、きっかけの一つを提供したといえるだろう。

8. 今後の課題

以上のように、セミナーワークショップの準備と開催をきっかけにいくつかのアクションが動きだしつつある。すなわちね①地元高校での「聞き書き」の実施と郷土教育カリキュラムへの導入に向けた取り組み、②トンプ村の行政村としての認知と自治の強化に向けた活動、などである。これらを具体化させていくことが当面の課題である。

①に関しては、関心を示したパル市およびドンガラ県の計 4 校 4 名の教師たちを核として、すでに具体的なアクションプランが練られつつある。特にパル市教育局は、農山漁村に受け継がれてきた暮らしの技や知恵を高校生たちが「聞き書き」を通して学ぶという取り組みに強い関心を示し、2013 年には市が予算を割いて日本に視察することが検討されている。インドネシア側のイニシアティブを尊重しながら、パル市を足がかりに周辺のシギ県やドンガラ県での展開の可能性も探っていきたい。

②に関しては、トンプの人々はすでに行政村としての認知を得るための請願書をシギ県政府に提出し、その結果をまっている状況にある。行政村としての認知を得られたとしても、森と共存する生業はいかに可能か、村の文化・慣習を若い世代はどう受け継いでいくのか、自治を強めていくためには課題も多い。これまでのトンプでの記録作業は、トンプの村人との協働作業ではあるものの、学びの主体となったのは、主に中スラウェシの都市部に暮らす若者や実践者であった。今後、トンプが自治の力を強めていくためには、村人自身が学びの主体となるような活動が必要となるだろう。これまでのトンプ村での活動のインパクトを村人とともに検証しつつ、村人がより主体となる学びのあり方を模索していきたいと考えている。

添付資料１：
ビジネス・インドネシア紙、2012 年 10 月 21 日掲載

Edisi Minggu Bisnis Indonesia
21 Oktober 2012

Ritual Perladangan Orang Tompu

Ammar Machmud
Pegiat Arwaniyyah Institute, Kudus, Jawa Tengah

Orang Tompu adalah satu komunitas peladang tradisional yang tinggal di dataran Sigi, Sulawesi tengah. Kampung mereka terletak sekitar 12 km dari pusat kota, Palu.

Namun, mereka jarang sekali pergi ke kota, karena kurang berminat atau tak ada yang perlu dibutuhkan. Bagi mereka, berkawan dengan alam adalah hal istimewa dan lebih dari cukup.

Orang Tompu adalah sebuah komunitas yang unik, karena mereka masih mempraktikkan sistem peladangan tradisional yang sarat ritual, kearifan lokal dan terbebas dari asupan bahan kimiawi buatan.

Namun, mereka bukanlah komunitas orang pedalaman yang terasing dari dunia modern sama sekali. Justru, mereka juga mengenal teknologi dan informasi secara baik laiknya orang perkotaan.

Orang Tompu memiliki banyak ritual aneh, *nyeleneh*, berbau mistik tapi sarat makna mendalam. Mereka dikenal sebagai pecinta padi daripada emas, karena bagi mereka padi lebih dari sekadar kebutuhan pokok. Padi laksana raja yang harus dihormati dan disayangi.

Peladangan padi merupakan bagian terpenting dalam kehidupan orang Tompu. Saking pentingnya padi, seorang pemuka masyarakat Tompu hingga mengatakan "Ane le ria pae, le ria ada" (Kalau tidak ada padi, maka tidak ada adat lagi).

Judul	: *Dunia Orang Tompu*
Penulis	: Hedar Laudjeng, Syahrun Latjupa, Matoko Shimagami
Penerbit	: Insist Press, Yogyakarta
Cetakan	: I, Juni 2012
Tebal	: iv + 79 halaman
ISBN	: 978-602-8384-53-4

Ungkapan tersebut kiranya tidak berlebihan, karena orang Tompu memproses peladangan padi penuh dengan ritual adat, sejak mulai membuka ladang hingga pasca panen.

Buku ini memberikan informasi akurat ihwal proses peladangan padi orang Tompu secara detail. Buku ini digarap dengan proses yang cukup lama dan melelahkan, karena tim periset memprosesnya cukup rumit dan susah-payah, lantaran keterbatasan pengetahuan tentang bahasa Orang Tompu.

Banyak sekali kata-kata dalam bahasa kaili (bahasa orang Tompu) yang sulit sekali diterjemahkan secara gamblang dalam bahasa Indonesia. Ini membuktikan betapa kaya dan dalam.

Secara umum, proses peladangan Orang Tompu terklasifikasikan menjadi lima tahapan. Ketika semua proses tadi telah berakhir dan panen berhasil, maka orang Tompu pun tak lupa senantiasa bersyukur dengan cara menyelenggarakan semacam acara 'tasyakuran', berupa pesta makan ramai-ramai dengan para warga setempat.

Sebenarnya riset tentang Orang Tompu telah dilakukan pada 2008 oleh tim gabungan Indonesia-Jepang. Namun, mengingat hasilnya cukup penting untuk disebarkan kepada khalayak luas, maka pelbagai bahan pun dikemas secara deskriptif dengan bahasa semudah mungkin, hingga lahirlah buku ini. (hlm: 72)

Potret Perlawanan Petani Banten

Muhammad Bagus Irawan
Pustakawan Fakultas Ushuluddin IAIN Walisongo Semarang

Di Indonesia, eksistensi gerakan dan perlawanan petani tumbuh sejalan dengan kebijakan liberalisasi ekonomi pemerintah Hindia Belanda pada 1870. Gerakan kapitalisme *cultuur stelsel* menyaratkan tumbal tanah dan keringat rakyat jelata.

Petani pribumi dipaksa bertani tanaman komoditas pasar dunia seamsal cengkih, cokelat, kopi, sawit, tembakau, dan lainnya. Nahasnya, mereka wajib kerja suka rela tanpa upah setara, dengan ancaman pidana kolonial.

Tekanan modernisme disertai gerakan ekonomi dan politik kapitalis, memerosokkan mental rakyat jajahan, dari ekonomi, sosial, politik, budaya, budaya, hingga agama. Dari sisi psikologis, meninggilah emosi perlawanan rakyat. Wajar, bila kala itu di Banten, banyak meletus pemberontakan pada otoritas kolonial.

Buku ini mendedahkan seluk-beluk dan rekam jejak perlawanan petani Banten pada 1888 yang berhasil mengejutkan dan menawan para petinggi kolonial. Namun, karena aksi perlawanan ini tanpa strategi militer yang jitu, akhirnya mampu diredam tentara Hindia Belanda.

Fokus buku ini meneropong relasi perlawanan petani dengan legitimasi doktrin agama yang didakwahkan Syekh Abd Al-Karim Al-Bantani. Tesis Hendri menegaskan, meski Banten sedari dulu dikenal dengan tradisi kanuragannya, tidakkah mungkin berani memberontak kecuali didorong spirit tarekat agama.

Judul buku	: *Doktrin Agama Syekh Abd Al-Karim Al-Bantani, Dalam Pemberontakan Petani Banten*
Penulis	: Hendri F. Isnaeni
Penerbit	: Kreasi Cendekia Pustaka, Jakarta
Tahun	: I, September 2012
Harga	: Rp37.500
Tebal	: x + 118 halaman

Tarekat Qadiriyyah-Naqsabandiyah yang dibawa Syekh Abd Al-Karim menandai sebuah gebrakan efektif untuk memobilisasi massa, mengorganisasi gerakan serta mengajarkan indoktrinasi ihwal cita-cita kebangkitan agama (hlm. 4).

Tercatat pada 8 Juli 1888, sebuah arak-arakan para petani, santri dan kyai melamaikan jalanan Cilegon. Siapa sangka bila arak-arakan bermusik rebana dan bersorban putih ini lantas menuju Ibu Kota *ufheling* Anyer untuk melancarkan aksi perlawanan pada kolonial?

Inilah puncak perlawanan terbesar yang didukung doktrin ajaran Syekh Abd Al-Karim, *jihad fi sabilillah*. Sontak saja, pasca perlawanan itu, pemerintah kolonial langsung memberedel dan mengawasi gerakan-gerakan tarekat dan agama.

Buku bergenre riset sejarah ini ditulis secara sistematis-akademis kedalam empat bagian dan penulis berporos pada riset kepustakaan dengan pendekatan sejarah dan filsafat.

Selain itu, riset ini berpijak dari disertasi sejahrawan Sartono Kartodirjo yang menyimpulkan pemberontakan petani Banten ditentukan banyak faktor yang kompleks.

Ditambahi dengan penelitian Snouck Hurgronje ihwal jati diri Syekh Abd Al-Karim yang kembali dari Arab membawa ajaran tarekat Qadiriyah-Naqsabandiyah.

Judul buku	: *Perang yang Mengubah Sejarah*
Penulis	: Michael Spilling
Penerbit	: Elex Media Komputindo, Jakarta
Cetakan	: I, 2012
Tebal	: 228 halaman
Harga	: Rp84.800

Mewujudkan Dunia Baru Lewat Perang

Fitria Zulfa
Alumnus Fakultas Ushuluddin UIN Sunan Kalijaga, Yogyakarta

Perang, tidak dapat disangkal, merupakan tragedi sejarah yang memilukan lantaran membawa kenestapaan, kemiskinan dan penderitan bagi umat manusia. Ini karena perang selalu merengut korban jiwa dari warga sipil yang tak berdosa.

Tak sedikit kaum perempuan dan anak-anak justru harus menjadi korban sia-sia dan trauma berkepanjangan. Kepedihan umat manusia akibat perang itulah yang jadi alasan bagi sebagian besar orang kemudian mengutuk peperangan.

Namun, bagi seorang penguasa perang dilihat dari sudut pandang lain. Meski mereka tidak menepis kesengsaraan dan kepahitan hidup di balik kecamuk perang, impian tentang dunia baru di balik peperangan itu menjadi impian banyak pemimpin.

Di balik maklumat perang, terselip tujuan agung untuk memberantas kejahatan, membangun masa depan bahkan mewujudkan perubahan. Sayangnya, untuk tujuan yang dianggap mulia itu perang menjadi prasyarat yang tidak terhindarkan.

Dengan kata lain, tujuan itu kadang hanya bisa diwujudkan lewat jalan perang. Kendati demikian, satu hal yang tak bisa dibantah bahwa perang ternyata bisa mengubah jalan sejarah dan bahkan dunia.

Buku ini secara kronologis merekam rentetan pertempuran yang terjadi dalam sejarah. Ada 22 perang paling berpengaruh dalam kurun sekitar 3.000 tahun yang diulas penulis dalam buku ini mulai pertempuran yang terjadi sebelum masehi sampai sesudah masehi.

Peperangan sebelum masehi yang diulas seperti perang Magiddo (1457 SM), Kadesh (1285 SM) Marathon (490 SM), Salamis (480 SM), Alesia (52 SM). Adapun, beberapa perang setelah masehi di antaranya perang Hastings (1066), Konstantinopel (1453), Nagashino (1575) dan perang Blenheim (1204 M).

Dari rentetan perang yang dicatat sejarah itu, ada pengaruh penting yang patut digarisbawahi. Peperangan itu bisa mengakhiri konflik yang sangat besar sehingga mampu memengaruhi kehidupan politik berikutnya.

Peperangan juga bisa menjadi titik balik dalam satu klimaks konflik meski masih berlangsung. Ini ternyata terbukti bisa menjadi akhir dari awal peperangan ataupun awal dari akhir peperangan.

Peperangan juga bisa dilihat sebagai ajang perkenalanan teknologi dan taktik baru atau bisa jadi gabungan keduanya. Peperangan seperti ini ternyata memengaruhi teknik dan taktik perang pada masa setelah itu.

Peperangan yang dicatat sejarah juga berpengaruh sangat besar pada "kesadaran" masyarakat modern.

添付資料 2:活動のプロセス

再編集ワークショップ（2012 年 3 月、パル市内にて）。

再編集作業は深夜 12 時過ぎまで続いた（2012 年 3 月）。

イラストの指導にあたった岩井友子さんと打ちあわせるヘダールさん（2012 年 3 月）

トンプ村のラングさん（左写真の右側、右写真の左側）に意味と内容を確認する（2012 年 3 月）。

パル市政府が市庁舎一室で開催されたセミナーワークショップ（2012 年 10 月）。

地元政府関係者、大学教員、NGO、村人、高校生など 80 名あまりが集った（2012 年 10 月）

、

ディスカッサントからのコメント（2012 年 10 月）

会場からの発言（2012 年 10 月）

トンプ村の他、周辺の村々からも村人が参加し、発言した（2012 年 10 月）

中スラウェシの村々に伝わる民俗音楽を掘り起こし、現代風にアレンジして演奏しているグループ。
セミナーワークショップでは、トンプの穂刈唄を題材にした歌を披露した（2012 年 10 月）

セミナーワークショップの夜、開かれた地方芸能、交流の夕べ（2012 年 10 月）

パル周辺の子供たちのグループも演奏し、交流した（2012 年 10 月）